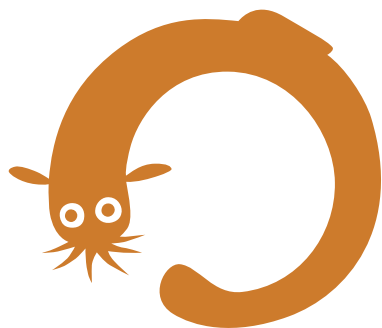


そうかわせみ、



そ
う
か
わ
せ
み、

Vol. 7



相沢正一郎

(ものがたりのはじめが、なによりも肝心……) 2



岡島弘子

干し首 4



一色真理

きょうふ 6



伊藤浩子

秋 10

そうか! 14

(ものがたりのはじめが、なによりも肝心……)

ものがたりのはじめが、なによりも肝心。……だけど、いつだって僕たちのことばは、その日の天候からはじまる。まるで、いつもの挨拶みたくに、ね。そのつぎに大切なのが、結びのひとつこと。本をとじたあとも、まだあしおとがひびいている、そんな沈黙。……だけど、どんなに目を凝らしたところで僕たちには、その最後の一文を読むことはできない。

僕たちが書いた文章は、うっかり床にぼらまいてしまった茹でるまえのスパゲッティのよう。〈朝、血液の循環がとまって痺れた重い腕〉をぶらさげて一日がはじまり、〈留守番電話にはいつていた英語塾とお墓の勧誘、叔母さんの声〉を聞いたり、〈自転車の鍵〉を失くしたり、〈干しっぱなしの洗濯物〉を雨に濡らしてしまったりしたが、どうやってストーリーに束ねられるのか。〈コートの袖口のぶらぶらのボタン〉が一体、その日のどんな伏線

になるのか。

だからだろう、眠るまえに極上の味のミステリー小説を読むのは。そして、朝になると僕たちは決まってベッドの下で本を発見する。何ページ目に指をはさんで眠ってしまったのかも忘れて……。

干し首

無音の部屋で干し首になる

こわれたアンプをなおして

半日

口をむすんで配線をつなぎかえる

混乱した社会情勢はおさまらない

つけかえるたびスイッチを押ししてみるが

スピーカーからは音のひとつもこぼれてこない

干し首がさらに水分をうしない

ひびわれかわくころ　まず

自分自身の配線をチェックしようとおもいつき

目　鼻　唇　耳をつけなおす

スイッチオン

と

沈黙していたスピーカーから

はじめの音がこぼれる

髪の毛の五線譜に音符を飾る

唇は全音符

耳はおおきくひらき

メロディのベールにつつまれる

こめかみの血管は

宇宙のリズムをきざみはじめ

目はとして

内なる銀河を透視する

干し首が

ト音記号になっている

きょうふ

新宿の地下駅はあの人の子宮に似ていた。

東の地平線からうす赤い雲を切り裂いて、半分だけの太陽が昇り始めた。

*

急行に乗ると、ささづか、めいだいまえ、さくらじょうすい、ちとせからすやま、つつじがおか、そしてあの人の住む駅に停車する。「きょうふ」「きょうふ」……。駅名呼称が聞こえる。両手で頭をかきむしりながら叫び声をあげる、人間の形をした真つ黒い巨大な影が、いつもホームの上に落ちていた大きな駅だ。ここからレールは二つの支線に分岐する。

*

レールは一本ずつ、電車も右と左と、半分ずつに引き裂かれる。もちろん乗客もだ。そのどちらに乗っても、必ずうみに流れ込むかわの上を渡らなくてはいけない。うみには引き裂かれた太陽のうみ半分が沈んでいるから、その血でうみもかわも真つ赤に染まっている。鉄橋を渡る間、片方だけになってしまった耳を、片方しかない手でどんなに強く押さえたとしても、長くて真つ赤な橋桁が激しく二つに引き裂かれる痛みに、我慢できずにあげる悲鳴が間断なく聞こえ続ける。

*

半分だけになった急行はもう終点まで止まらない。レールは一本しかない。車輪も片側しかない。車輛も半分だけだ。ぼくの手も足も一本しかない。腹も背中も真ん中からまつぶたつだ。ぼくの片目は今頃もう一つの支線を疾走する半分だけの電車の中で、一本だけに

なった反対側の手で吊革につかまりながら、失われたぼくの半身を探し回っているに違いない。けれどぼくは、反対側に行つてしまつたもう半分のぼくと、二度と出会うことはないのだ。

*
*

あたしはその朝、玄関のドアを開けると、廊下に真理の片目、片耳、片手、片足が飛び散っていました。だから、あの子が今日、ついに「ぎょうふ」を越えたのだと、わかりました。でも、ここへ来るまでの間に襲われて、食べられてしまったのでしょうか。ふふふ……、ばかな真理。巨大な陰茎を顔の真ん中に生やしたあたしの夫に、食いちぎられてしまったのだわ。

起きてみると小さくなった夫がダイニング・テーブルで新聞を読んでいた。正確に測ってみたわけではないけれど、夫はワン・サイズ以上、小さくなっていった。小さくなるって言っていたけれど今日だったんだね、そう声をかけようかどうしようか迷ったがけつきよく黙って夫の正面に座った。見ると新聞も一回り以上小さくなっている、判も、フォントも、記事のスケールも。辺りはシンとしている、十月に入ったばかりの土曜日の朝。

きみのホット・サンドが食べたいな、と夫がますます小さくなった声で言う。パジャマ姿のままキッチンに立つ。ツナ缶をあげ、油分をとって器に移す。冷水にさらしておいた玉葱とピクルスを刻み、マヨネーズとピネガーで和える。出窓から見えるのは古ぼけた景色。目に映るすべてを壊してしまいたいなつかしい衝動に一瞬駆られるが、夫に聞こえないように鼻で小さく深呼吸して、食パンを切る。

食材を挟み、専用のプレートに押し込んで、五分待つ。休日の時間は間延びしているようで、その実、鋭利だ。

シンク・タンクに寄りかかり、昨夜の一部始終を思い出していた。三年間、夫に内緒で付き合った年上の女。彼女の長い指と肉厚の舌はしつこく、今も生温かさといっしょにからだの奥に潜り込んでいる。逃れるように同時に誘うように昨夜も下半身を振ったと思う。無意識のうちに自分の手先の匂いを嗅いだ。二週間前からできた嫌な癖だ。この癖にも辟易していたから、終わったあとで別れを切り出すと、彼女は何も言わずに視線だけで裏切りを責めていた。

中東でまた殺されたってよ、アッバスの側近だった男らしい、メイヤの義理の従姉妹だか姪だかが主犯だったってさ。

夫は話題が中東に及ぶといつも饒舌だ。
女ってこれだからな。

なに？

いや、相手がゲリラのほうがいいいろいろ大変だと考えるのは、素人だからかもしれないということだよ、ところでホット・サンド、もちろん小さく作ってくれたよね？

ごめん、気づかなかった。

気づかなかった？ あんなに何度も言うておいたのに。新聞だつてスリッパだつて、このバジヤマだつて、今日のために用意しておいたのに、気づかなかつたつてきみは言うの？

ホット・サンドなら切つて小さくすればいいじゃない。そんなこと、できない。

どうして、と言いつけるとベッド脇のスマート・フォンが鳴る。彼女からのEメールだ。視界がぼやけてよく見えなかつたが、そこには「ものごとが小さくなることにあなたはいつも無関心でした」とあつた。「あなたのその欠陥は、直接的にしろ間接的にしろ、いつかあなたを決定的に苦しめるでしょう」。

室温が急に下がつたようだ。ベッドに腰掛けたまま床暖房のスイッチを入れると、飼い猫がどこからかやってきて膝にのつた。夫が可愛がつている牝猫だ。心なしか軽くなつている。

彼女ナラ既ニ小サクシテオイタヨ、夫が着替えながら言う。驚いておもわず聞き返してしまふ。

彼女つて？

夫は答えない。新しいトレーナーと新しいチノ・パンツ、新しい

靴下、すべて小さい。間違つた遠近法を使った、間違つた絵画みたいに。手を伸ばして触ろうとしてもそれはますます遠ざかつてゆく。夫は黙つて部屋を出ていった。

私の周りで、秋は確実にその色合いを深めていった。（誰かが何かを）奪い返そうとしているのだ。

そうか！

夢の中で有名人に会うことがある。先日はイチローとあやしげなお店に出かけた。店内いっぱいベッドやテーブルが置かれていて、見知らぬ男女がでんでに戯れている。しかし、ぼくとイチローは会話に夢中で、みんなのような気分にはとてもなれないのだった。

昨日はタローと「地下鉄の日」のパレードを眺めていたら、突如飛び込んできた大きな豚に襲われた。豚におしっこをかけられたタローが、ぼくに助けを求めに駆け寄るので、ぼくは豚とタローから必死で逃げる。その途中でタローは地面に開いた割れ目の底に、悲鳴と共に落っこちてしまった。それでもぼくは恐怖にかられて走り続け、地面の中へ土に溶け込むように身を隠した。

目が覚めたら足が痛い。見ると、足の裏にレコード針が突き刺さっている。ぼくはやつぱり捕らえられ、あの豚に罰を受けたのだ。(一色)

夫が出掛けると家事に取り掛かった。午前中のうちにできるだけこまめに体を動かすようにする。そうすれば午後の時間を好きだけ自分のために使えるから。今日こそは浴室を隅から隅まで磨いてしまおう、そう決意して排水溝の外蓋を裏返すと、長い黒髪でびっしり覆われていた。私はショート・ヘアだ、いったい誰が、と思っているうちに、リビングで電話が鳴る。よほど無視してしまおうかと思ったが、思い直して濡れてない方の手で受話器を取る。「もしもし？」何度たずねても相手は何も言わない。そのまま受話器を握り締めていると今度はドア・ベルが鳴った。チェーンを掛けたままレンズを覗く。無人。寝室でスマートフォオンが鳴る、次にリビングでタブレットが起動する、テレビが点く、コンボが録音を開始する、エア・コンとレンジが同時に動き出す、再び電話が鳴る。私は身動きが取れない。畏なのだ。(伊藤)

二の腕にかすかにふれてすぐ消えたものがある。あれはなんだったのだろうか。空気にまぎれこんだ秋の気配のような、サンツがるリングゴのかおりのような。秋風やリングゴのかおりという事物が人間の言語のむこうがわからわたしたちに直接呼びかけているのかもしれない。それを人間のことはで秋、そしてリングゴという名前に翻訳する、その呼び名をあとから思い出す。厳密に言えばそんな動作を私は無意識におこなっているのかもしれない。「純粹言語」は「人間の言語」に翻訳され取り込まれている。ところがそれが制御できなくなつて、「純粹言語」が直接語り出すということが起こつた。それが地震であり、津波であつた。)これは瀬尾育生さんの『純粹言語論』という本の一部である。事物が人間の言語のむこうがわから声を挙げている。詩人は、この直接の呼びかけに敏感でいなければならない。そう思つた。(岡島)

むかしむかし、手塚治虫とつげ義春のマンガに夢中だつた。ピンク・フロイドの大音響のスペクトルに酔い、サテイの家具のような慎ましいピアノや武満徹の水の滴る音に耳を澄ました。寺山修司や唐十郎の外蓮味たつぷりの舞台に刺激を受け、ベケットや別役実の世界に立ちつくした。いま後者の影響のほうが強くわたしの作品に残っている。体質にあつていたんだろう、きつと。ジョン・ケージの『4分33秒』は、演奏者がピアノの蓋をしめて椅子に坐つたまま。4分33秒たつてから立ち上がる。過激さが、沈黙だつた驚き。今年の十月に詩集『プロスペローの庭』を出す予定。書籍紹介に、こんな文章を書いた。(甘い味をのこしたまま冷たい水に束ねたスティックニンジンが消えた後のコップ。あしあとの途切れた後の日記のページ。……そんな沈黙と釣り合う、ささやかな葉ずれのことば)。(相沢)

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、Vol.7 2012年10月15日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
